

「裁縫する女」のジェンダー・ポリティクス

講師 ワタナベ・コウ

2014年10月21日(火)

和光大学 E棟1階

コンベンションホール

13:00~14:30

ワタナベ・コウの「裁縫する女」のジェンダー・ポリティクス」資料 01

●ワタナベ・コウの目を見た「裁縫」の歴史

年代	洋裁	和裁
江戸 1854	ベリー 2度目の来航時、篤姫にミシンが贈られた	
	末頃 足袋、手甲、脚絆の職人(男性)が軍服を作るようになる	妻または母が家族の衣服を製作
明治 1883M16	鹿鳴館時代(〜87)で洋装化普及を試みる→貴族子女向けの洋裁教育(英語教育とセット)→87年仮装舞踏会は下田歌子(華族女学校校長)が仕掛人とも	
1894M27	日清戦争(〜95)	
1895M28		下田歌子が十二単でヴィクトリア女王に謁見
1899M32	高等女学校令発布	女子のみに裁縫教科→裁縫は女徳を養う→良妻賢母主義思想(現在に至る)
1900M33	「シンガポール縫製女学院」が東京、大阪、横浜等に開校	高田高等女学校(ワタナベ・コウ母校の前身)創設
1904M37	日露戦争(〜05)→国粋主義高まる	
1910M43	大逆事件	
1911M44	『青鞥』創刊	
大正 1918 T6	第一次大戦終結→モボモガ(奇抜な服としての洋服)	
1922 T11	文化裁縫女学院(現文化服装学院)創設 伊藤野枝「婦人自らの頭脳を改造することに」執筆→『婦人世界』23年1月号掲載	
1923 T12	関東大震災→動きやすい衣服(アツパッパ、セーラー服)としての洋服に注目→洋裁学校人気	
昭和 1935 S10	失業貧困対策としての洋裁教育が普及 →女性の収入獲得への道	
戦時中	もんぺ、国民服によって洋服の動きやすさが認識される→戦後洋裁学校ブームの下地	
戦後	洋裁学校ブーム→消費者としての「女性」発見	
1948 S23	『暮らしの手帖』(花森安治編集長)創刊	
1950 S25	朝鮮戦争はじまる→日本特需景気	
1951 S26	繊維業盛況→既成服の時代へ	
1954 S29	桑沢洋子が桑沢デザイン研究所を創設	
1959 S34	美智子さまご成婚→テレビにより洋装の魅力が一気に普及	
1970 S45頃	ひと世帯あたりの既成服数が自作服数を上回る	
1977 S52	桑沢洋子死去	
1978 S53	花森安治死去→自作することによって「日本人の洋服」を発見できると考えて実践したふたりの死	
1980年代	DCブランドブーム	
1990年代	バブル崩壊	
1998	ユニクロの1,900円フリースが大ブームに	



『暮らしの手帖』から直線裁ちの記事が減る

着付教室が人気→着物を日常的に着なくなっていた
→礼儀作法(=良妻賢母)としての和裁

ワタナベ・コウの「裁縫する女」のジェンダー・ポリティクス」資料 02

●ワタナベ・コウと「裁縫」の関係

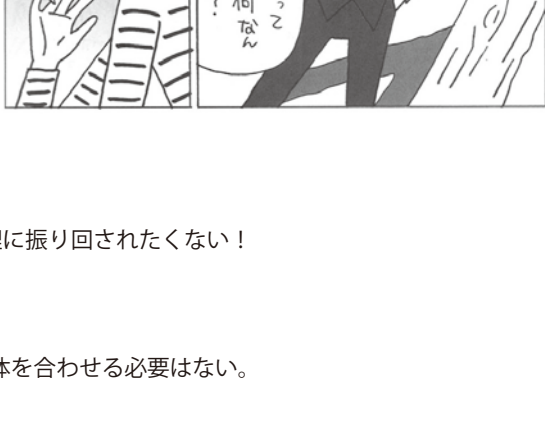
[1] 自己表現

- 自分が着たい服を自由に作りたがり、好きな服しか作らないのはつまらない→だから、先生としても活動
- 作った服を売らないの? →売れる服を作るのはつまらない
- 自己表現が「裁縫」のみ? →絵も描き、文章も書き、雑誌も作ります
- ファッションデザイナーにならなかったのは? →自己表現できないし、マーケティングを重視するような市場経済の論理にのっとった服作りに共感できない



[2] 先生

- みんなと一いつしよに作れば情報共有できる
- いろんな人が参加→ジャーナリストの視線と接すると楽しい
- いろんな人が楽しんでいる→誰も自己表現の欲求を持っていることを知る
- ダサくてフォーマル過ぎるコートやスーツを作る「裁縫」
- 生徒が作りたがるものの作り方を教える→自分が作らないものを疑似製作できる
- 生徒が着たい服の作り方を教える→人間と衣服の関係を探求できる
- 建築と違って、衣服はそれ単体で成立せず、生身の人間の肉体あつての構造物。同じ人物でもその肉体が変化すれば違う服になる→デザインを探索できる
- 偏差値 38 の高卒主婦から東大理工男子学生まで参加→格差を無にするコミュニケーションツールとしての「裁縫」の発見



[3] 資本主義への小さな抵抗

- 不必要なものを作って売り続ける資本主義を最も具現化している服飾産業の経済論理に振り回されたくない!
- 気に入った服がもう1枚欲しいと思ったときには売ってない!
- 既成服が安価で高品質になったなんて大ウソ! かわいい服は超高価!
- 既成服のサイズは今はなにに M サイズばっかり! 「裁縫」技術を習得すれば、既成服に体を合わせる必要はない。

●ワタナベ・コウが教えたくない「裁縫」とは?

[1] ひとつの型に沿った「裁縫」

- しつけや印つけ、仮縫いをしななければいけないと思込んでいる「裁縫」
- ダサくてフォーマル過ぎるコートやスーツを作る「裁縫」
- 先生の趣味の押しつけの「裁縫」



[2] ヒマつぶしの「裁縫」

- サイズ無視のラクチン着しか作らない「裁縫」
- 本や説明書どおりにしか作らない「裁縫」
- 時間をかけるほどよいものが作れるという考え(良妻賢母教育)の「裁縫」

[3] 知識の積み重ねをしない「裁縫」

- 自分ひとりで作れるようになることを目標にしない「裁縫」
- 布やデザインについて教えない「裁縫」

ワタナベ・コウの「裁縫する女」のジェンダー・ポリティクス」資料 03

●ワタナベ・コウが私塾「コウ手芸部」で教えている「裁縫」とは?

[1] 服は誰にでも作れる!

- 専門教育を受けた人のアイデンティティ破壊になるため、公開されて来なかった効率的服作りのコツを公開
- 必要なのは服装の専門的知識や、技術獲得のための辛くきびしい修行ではなく、服の仕組みを知ろうとする好奇心
- ドレスの最初から最後(デザイン、型紙、布選び、縫製)までを自分ひとりで行えば、服の仕組みを学べる
- 丈つめや痛んだ部分の修正など、服のリフォームもできるようにする

[2] 自分の着る服を自分で作ることは自己表現だ!

- 自分が着る服のデザインを自分で決めて作れる
- 好きな色や細部へのこだわり、気づけなかった「自分」を発見できる
- 奇抜な洋服を作ることだけが自己表現ではない

[3] 初心者でもカジュアルな外出着が作れる!

- コツを知られば、初心者でも1日で作れる服がたくさんある
- 体の寸法、好みのゆとりや丈を反映できる

[4] 効率よく作ろう!

- しつけ、印つけ、仮縫いはしない
- 少々ミスは着ちゃえば気にならないので、ガンガン作る
- 完成体験を積むことが上達の近道

[5] 布を知ろう!

- 服は形よりも布選びが重要
- 同じ形を布違いで作れば「違う服」になる
- 初心者のうちは、縫いやすい布を選ぶ



[6] 型紙作りに必要なのは数学の知識!

- 手持ちの既成服を参考に、市販の型紙を補正するが作図すれば、ラクに自分サイズの型紙が作れる
- 自分サイズのシャツ、スカート、パンツの型紙がひとつあれば、ほぼすべての服にアレンジ可能
- 型紙は違う服ごとにいちから作図する必要はない。使いまわす

[7] ミシン業界の罠にハマるな!

- ミシンの値段と性能は「男」が「女」を騙して売って成り立ってきた業界である
- ミシンの値段と性能は比例しない(不要な機能が増えるだけ)
- 3万円の家庭用ミシンでも服は作れる(ロックミシンはあったほうがよきれいに早く作れる)
- 正しく使えばミシンは壊れない

ワタナベ・コウの「裁縫する女」のジェンダー・ポリティクス」資料 04



●ワタナベ・コウの経歴

- 1963年3月24日、新潟県新井市(現妙高市)に生まれる。
- 1976年、中学入学のお祝いミシンを買ってもらったのをきっかけに洋服作りにハマる
- 1981年、高田北城高校を卒業、東京外国語大学インド・パキスタン語科ヒンディー語専攻に入学する。2年後、同校を中退、アルバート先のそば屋の裏に偶然住んでいた出版社社員にイラストを持ち込み、イラストレーターとして雑誌、書籍で仕事をはじめ。

・ソーイングの得意なイラストレーターとして評判になり、1992年、NHK教育テレビ『おしゃれ工房』に簡単ソーイングの講師として初出演。「しつけはめんどくさいのでしない」という正直な発言と論理的でわかりやすい解説がよくも悪くも大ウケ。ソーイング部門のカルスマ人気講師に(笑)。同年、しつけなし、印つけなしで服を作る方法を自らのイラストで徹底解説した『ワタナベ・コウのクイックソーイング』(全3巻/文化出版局)を出版(のち、担当者に絶交される)。

・2002年、真の初心者のためのソーイング教室が存在しないことを知り、生活費捻出のためもあり、私塾「コウ手芸部」を開始(現在に至る)。

・2003年、カタログハウスの学校のイベントとして1日で服を作る教室の講師を依頼される。電話がバクするほどの応募数を獲得して好評を博し、東京、大阪での定期開催、名古屋、福岡、仙台での出張教室を行なう。現在は、カタログハウス大阪本店でのみ年3回開催。

・2004年、『週刊朝日』(朝日新聞社)でイラストコラム「ワタナベ・コウの街角コレクション」を連載開始。流行の服装を「かっこいい」以外の視点で斬る「毒舌」コラムと、かわいイラストのアンバラスさで好評を博すが、06年、NHK番組共演者の服装に対する批評が不適切と判断されて連載終了。以降、NHK『おしゃれ工房』への出演もなし。

・2010年、ブログに毎日アップしていた裁縫ヤガ漫画を歌人・柳野浩一氏が「今、いちばん続きが気になる漫画」と Tweet したことをきっかけに人気。ブログ(そのブログは現在閉鎖)となり、11年2/16『裁縫女子』(日本エモ社)として出版される。同年、東北震災直後の Tweet の目撃者にごはんを炊く方法が現在閉鎖)となり、7/27『節電女子』(リトルモア)を出版。

・2012年、デザイン、パターン製作、縫製、コーディネートを担当した、洋服とイラストの本『裁縫女子宣言!』(バジリコ)を出版。

★毎日最新更新のブログ「コウコラム」→<http://www.kureyan.com/column-kou>

★隙り描き漫画ブログ「猫のマリコ、ミシンはじめました!」→<http://fanblogs.jp/nekonomariko/>

●「コウ手芸部」では参加者募集中です!

小物コース、洋服コースがあります。超初心者大歓迎!

ミシンの使い方からしてないわいマンツーマン指導します。

《時間》

平日昼間 13:00~15:00 / 土日祝昼間 13:00~17:00

夜間(平日のみ) 19:00~21:00

《料金》

入会金 5,000円 / 講習費 2時間 × 4回 : 10,000円

2時間 × 12回 : 24,000円 / 2時間 × 24回 : 48,000円

《場所》

京王線・世塚駅より徒歩5分 / 井の頭線・下北沢駅より徒歩15分

詳細&参加申し込み→クラウドコム (<http://www.watanabe-kou.com>)

メール→pcchi@watanabe-kou.com

電話→03-3468-9281 (12:00~21:00)



【参考資料/書籍】

『吹けよあれよ風よあらしよ 伊藤野枝選集』(森まゆみ編/学芸書林)

『ふだん着のデザイナー』(桑沢洋子/ほるぷ)

『評伝・桑沢洋子』(桜井朝雄/桑沢学園)

『花森安治の仕事』(酒井寛/朝日新聞社)

『花森安治の編集室』(唐澤平吉/晶文社)

『近代日本の「手芸」とジェンダー』(山崎明子/世織書房)

『『青鞥』を読む』(新フェミニズム批評の会編/学芸書林)

『皇后の肖像―昭憲皇太后の表象と女性の国民化』(若菜みどり著/筑摩書房)

『アリスの像がらついた ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』(坂井妙子/勁草書房)

『良妻賢母の誕生』(清永孝/ちくま新書)

『日本女性史論集 8 教育と思想』(総合女性学研究会編/吉川弘文館)

『近代日本文化論 8 女の文化』(青木保ほか編集委員/岩波書店)

『大正期の女性雑誌』(近代女性文化史研究会編/大空社)

『女性誌の源流』(浜崎廣著/出版ニュース社)

『はいからさんが通る』(大和和紀/講談社漫画文庫)

『新編 日本のフェミニズム 10 女性史・ジェンダー史』(岩波書店)

『洋裁の時代 日本人の衣服革命』(小泉和子編著/農文協)

『「アン」1970』(赤木洋一/平凡社新書)

『女子教育事始』(小川織衣/丸善ブックス)

『学校制の文化史 日本近代における女子生徒服の変遷』(難波知子/創元社)

『青鞥の時代-平塚らいてうと新しい女たち』(堀場清子/岩波新書)

『良妻賢母という規範』(小山静子/須臾書房)

『皇后の近代』(片野真佐子/講談社選書メチエ)

『脱資本主義宣言 グローバル経済が蝕む暮らし』(鶴見済/新潮社)

『日本女性服飾史』(井筒雅風/光琳社出版)

『ミシンと日本の近代』(アンドルー・ゴードン/みすず書房)

【参考資料/雑誌】

乃木希典と下田歌子/橋川文三 『文藝春秋』1966年1月号

女子教育の根本問題/下田歌子 『中央春秋』1913年7月号刊

下田歌子の女の武器 『SOPHIA』1995年7月号

美貌と才能にめぐまれた女子教育の第一人者 下田歌子 『with』1983年2月号

女子の美育/下田歌子 『女性』1905年12月1日(15巻12号)